

アーサー・コナン・ドイル作

伊豆野 良江訳

クルンバー館の怪異

The Mystery of Cloomber, by Arther Conan Doyle, Translated by Yoshie Izumo

第三章 ヘザストーン少将との交際

はたして、小さな村は、あの館に新しく人が越して来たというニュースで、持ちきりだった。今度の住人はどんな人だろうとか、こんな辺鄙なところに何しに来たんだろうとか、いろいろな臆測が飛び交った。目的がなんであれ、その一家は長く腰を落ち着けるつもりだった。何日もたたないうちに、ウィグタンから配管工や建具屋が入れ替わり立ち替わり現れては、朝から晩まで工事の音が響くようになった。見る見るうちに、雨風で見る影もなかった部分が跡形もなく修復され、その四角い豪邸が新築のように生まれ変わったのは、驚きだった。ヘザストーン少将が金に糸目をつけていないところを見ると、どうやら経済的な理由で引っ越してきたのではないらしい。

「何かのに打ち込むためかもしれないぞ」朝食のテーブルで少将の話題が出たとき、父が言った。「手がけている大作があって、それを静かな場所で仕上げようと思ったんじゃないかな。もしそうだったら、喜んでわが家の図書館を提供するんだがね」

エスタもわたしも吹き出した。ジャガイモ袋二袋分の本が、図書館だなんて！「そうかもしれないですね。でも、この間会ったときは、そんな文章を書くような人には見えなかったなあ。ぼくは、療養しに来てるんじゃないかと思えますけどね。きっと医者に勧められたんですよ。神経治療には、ここみたいに静かなで空気のおいしい場所が一番だ。ぼくを見る目つきといたら普通じゃなかった。指なんかぶるぶる震えて、どう見たって病気ですよ」

「ご家族はいるのかしら」と妹が言った。「さぞ寂しい思いをしてるでしょうね。わたしたち以外に御近所っていったら、十キロ以上も離れてるんですもの」

「ヘザストーン少将といえば、よく知られた軍人だよ」父が言い出した。

「まあ、お父さま、どうしてそんなことご存知なの」

「コーヒーカップを口のところまで運ぶと、父はほほえんだ。「おやおや、さっきわた

しの図書館を笑ったのはだれだっけ。これで時には役に立つのがわかっただろう?」「そう言いながら、父は棚から赤い表紙の本を取り、ページをめくった。「これは三年前のインド駐留軍人リストだ。ほら、ここにゐる、

ヘザストーン・J・B、バス勲位、V.C.、いいかい、ビクトリア十字勲章だよ。前インドベンガル歩兵四十一連隊大佐。現在は退役陸軍少佐、1888年、グズニー攻略およびジェララバッド、サブローンを死守。インド反乱軍鎮圧、オウド征服。軍の殊勲報告書に載り表彰されること五回。

今度来る住人は、われらの誇りっていつわけだ」

「結婚してるかどうかは書いてないの?」「と妹が尋ねた。

「ないね」父は白髪を振りながら言った。ちょっと気の利いたことを思いついたときよくやる癖だ。「勇敢な戦歴の欄にないからね。でも、まあ結婚していると思うよ」

しかし、この疑問は意外に早く解けることになった。というのは、館の改築が終わったその日に、馬でウイングタンに出かける機会があつて、その途中で、ヘザストーン少将とその家族が引越して来るところに出会つたのである。馬車には、少将とやつれて病弱そうな年配の女性、その向かいの席に、わたしと同じ年頃の若い男とそれより少し年下の少女がいた。わたしが帽子を上げて通り過ぎようとすると、少将は御者に馬車を止めさせて、手を差し出した。昼の光のもと、いかにもいかめしく険しい表情をしているが、冷たい人間には見えない。

「こんにちは、フォザギル・ウエストさん。先日は失礼しました。軍隊生活が長かつたもので、ぶしつけな物言いになってしまいましたね。それにしても、スコットランド人にしてはお顔の色がずいぶん黒いですね」

「スペイン人の血が混じっているんですよ」わたしはそう言ったが、なぜ顔色ばかりにこだわるのか不思議だった。

「なるほど、それなら納得できます」少将はそう言つと、夫人に呼びかけた。「おい、紹介するよ。これが家内です。こちらはフォザギル・ウエストさん。こっちは息子と娘です。田舎でのんびり暮したいと思ひましてね」

「それじゃ、ここはうつつつけの場所ですよ」

「そつ思われますか? 確かに、静かすぎて寂しいくらいですな。夜に出歩いたとしたら、誰にも会わんでしょいな」

「そうですね、日が暮れたら、出歩く人はそついないでしょうね」

「それでは虫けらみたいな連中はうるついでいませんね? 浮浪者とかや物乞いとか、たちの悪いジプシーといったたぐいの連中は」

「だいぶ寒くなってきましたわ」ヘザストーン夫人が、シルスキン製の外套を引き

寄せて言った。「それに、ウエストさんをお引きとめしては」迷惑よ」

「ああ、そうだった。おい、馬車を出してくれ。ではウエストさん、おやすみなさい」
馬車は館めざしてがたごと走り去り、わたしは物思いにふけりながら、ウィングタンへ馬を走らせた。本通りを通っていたとき、マクニール氏が事務所から走り出てきて、手招きをした。

「この間の借家人、引越していきましたよ。今朝馬車でね」

「途中で会いました」とわたしは答えた。

小柄な管理人の顔は真っ赤で、かなり酔いが回っている様子。

「やつぱり、本物の紳士は違いますねえ」と言って、笑い声をたてた。「ものわかりがいいのなんのつて。あの將軍、財布から小切手を取り出して、テーブルに置いて言うんですよ。』いへんにすればいいかね。』ってね。』二百でお願ひします』ってわたしは言っただんです。手数料もすべて含めてですよ」

「でも、手数料は地主さんからも支払われたんじゃないですか？」

「そう、そのとおり。でも、もらえりゃもらえるだけありがたい。それから、金額を書いた小切手をひよいと投げてよこした。使用済みの切手みたいだね。取引はお互い正直にしなきゃ。片方がだまくらかそつと思つたら、こんなにつまはいかなかつたでしょうね。ウエストさん、ちよつと寄つていきませんか？ ウイスキーをごちそうしますよ」

「いや、けつこうです。やらなきゃいけないことがあるんで」

「そつ、そつ、仕事が大事。朝っぱらから飲んじゃいけませんや。いやなに、わたしだって、食前と食後に一、二杯やるだけ。食欲増進と消化促進のためにね。午前中はアルコールは飲まないようにしてますよ。ところで、あの將軍、どう思います？」

「どつって言われても、まだそんなに詳しくは知らないし」

マクニール氏は自分の額を人差し指でたたいた。

「わたしが思つにはね」首を振りながら急に声をひそめた。「ここがいかれてますよ。」

そつは思いませんか？」

「管理人の言つとおり小切手を書くからですか？」

「悪い冗談やめてくださいよ。ここだけの話ですがね、港までどのくらいの距離かって聞くんですよ。それだけじゃない、東から船が来るのかとか、浮浪者はいるのかだとか、あげくは、敷地を高い塀で囲つたら契約違反だろつか、なんて言つんだからね」

「確かに変人みたいですね」

「高い塀に囲まれている所なら、將軍にもつてこい場所がありますよ。そこなら、お金もかからないしね」

「いったいどこですか？」わたしは相手に話を合わせた。

「ウイグタン州立精神病院ですよ」と言って笑い出し、いつまでも笑い続けているので、わたしはマクニールをそのままにして立ち去った。

クルンバー館に新しい住人たちが越してきても、この人里離れた場所での単調な生活に変化がもたらされることはなかった。わたしたちは貧しい小作農や漁師たちの暮らしの改善に取り組んでいたのだが、残念ながら、この一家はそういうことには一切関心がなかった。それどころか、田舎の自然を楽しもうともせず、徹底して人目を避け、門から一歩も出ようとしなかった。

まもなく、管理人が言っていた、敷地を塀で囲うという話は本当になった。職人たちが大勢やってきて、早朝から深夜まで板塀を建てる作業を始めた。できあがってみると、ぐるりとめぐらした塀の上に、さらに尖った釘を据え付けるほどの念の入れようだ。これほどの鉄壁の守りの前では、よほど向こう見ずでもない限り、進入しようとする者はいないだろう。この退役軍人は、骨の隋まで軍人氣質なのか、常に守備を固めないと気がすまないらしい。

驚いたことに、將軍はそれからというものの、籠城でもするようにせつせと食料の買いだめを始めた。ウイグタンの大きな食料品店の店主ベグビーが、半ばあきれ半ばうれしそうに語ったところによると、保存用の肉や野菜を片っ端から注文したということだった。

この常軌を逸した振る舞いが人の口の上らぬはずはなく、この地方はもちろんのこと、イングランドとの境界付近に至るまで、クルンバー館の新しい住人のことがあれこれ取りざたされるようになった。結局、村人たちは、マクニール氏と同じく、將軍の一家は気がふれているのだろうという説と、いや、將軍は何か重大な犯罪を犯して逃げ回っているに違いないという二つの説におちついた。妥当なところだったが、わたしにはどうしてもひっかかるものがあつた。

初めて会ったときの振る舞いは、確かに正気でないと思われても仕方ない。けれども、二回目に会ったときの非常に理性的で折り目正しい態度は、どう考えたらいいのだろうか。それに妻子まで同じ生活を送っている理由がわからない。逃亡説については、もっと道理に合わない。ウイグタンシアはもちろん辺鄙な場所ではあるけれども、ここで有名な將軍が身を隠しおおせるとは思えないし、第一それなら、噂になるようなことをわざわざするだろうか。

わたしはこの謎を解く鍵は、將軍自身の言葉にあると信じたかった。煩わしい人間関係から開放されてのんびりするためにここにきたのだ。そして、この後すべて、

一家の人付き合いの悪さときたら、病的なほどだという事実を目の当たりにすることになった。

ある朝、父は重々しい表情を浮かべて、わたしたちに言った。「エスタ、ピンクのドレスに着替えなさい。ジョン、おまえもきちんとした格好をするんだ。今日の午後、ヘザストーンさんのところにご挨拶に行くことにしたからな」

「クルンバー館に行くの？」妹は思わず手をたいた。

「わしは管理人であるだけでなく、地主の身内でもあるんだ」と父はもったいぶって言った。「ウィリアムだって、新しい住人を訪問して、親切にしてあげてほしいと思うだろう。」

將軍の一家も、知り合いがいなくて、寂しい思いをしているに違いない。あの偉大なフェルドウスイは何と言ったか？ 『家の最上の装飾は、友人である』」

妹もわたしも、父がペルシャの詩人たちの言葉を引用し始めたが最後、もう後へは引かないことを知っていた。その日の午後、父は上等な外套を着込み、真新しい乗馬用手袋をはめて四輪馬車に乗り込んだ。

「さあ、乗った、乗った」父は鞭をピュツと鳴らした。「こんな場所にも恥ずかしくない一家がいることを將軍に示さなければならぬ」

奢れる者は久しからず！その日は、立派な子馬もぴかぴかの馬具も、結局クルンバーの住人の目にとまることはなく、わたしたちの訪問も失敗に終わることになった。

馬車が門前に到着し、わたしは飛び降りて門を開けようとした。と、そのとき、一本の木に打ち付けられた木製の札に気がついた。その大きな白い板は、嫌でも目に付くところに掲げてあり、黒々とした太い文字で次のように書かれていた。

ヘザストーン家はあなたのお付き合いもお断じします

わたしたちは、しばらく呆然とこの掲示を眺めるだけだった。エスタとわたしは、あまりのばかばかしさに吹き出してしまったが、父は何も言わずに馬車を方向転換させて、家に走らせた。そんなに憤慨した父を見たのは初めてだった。父は自分のプライドが傷つけられたことより、自分が代理をしている地主が侮辱されたことを怒っていたに違いない。

先行訳があるのを承知で挑む「新訳の意味」とは？

伊豆野 良江

「存知のようにコナン・ドイルの作品はほとんど翻訳されている。あえて新訳をするというにはそれなりの覚悟がなければならぬ。わたしが『The Mystery Clumber』を翻訳しようとしたのには、たまたま Hesperus Classics という叢書の存在を教えられ、その中に本書が入っていた、というのがきっかけ、そして、根っからのミステリー好きがあって、ぼつぼつと翻訳しだし、そうしたら半ば以上翻訳したとき北原尚彦氏の「新訳」が出てしまい、これではもう五十年先でないといふの目を見ないだろうと諦めていたのだが……

「新訳はなん通りあっても価値があるものだよ」

と藤岡編集長に励まされ、心を入れ替え、旧訳・新訳をすべて目の前に置きながら、「わたしの古典新訳」に挑戦することにした。

まずこの二つの先行訳を読み比べてもらいたい。

荒れ果てた無人のクルンバー御殿だったが、漁師たちの目じるしとしては役に立ったのである。地主の屋敷の煙突とクルンバー御殿の白い塔とが重なって見えるようにして船を進めれば、吹きさらしの内海が荒れたときでも、眠れる怪物よろしくぎざぎざの背中を突き出したぶつそつな暗礁を避けられるといふことを、かれらは経験によって心得ていたのである。

こつこつ荒れ果てた土地へ、運命の気まぐれが私の一家を連れて来たのだ。けれども、寂寥はさして苦にはならなかった。都会の喧騒と、乏しい収入で世間体をつくろうと気苦労に引き換え、この土地のはるかなる地平線と肌を刺す冷気の中には、魂まで洗いきよめて

くれるような晴朗さがあった。

松原 正訳

無人のまま黴だらけになった館は、漁師の目印としての役目のみを果たしていた。地主屋敷の煙突とクルンバー館の白い塔とが一直線に重なるように舵を取れば、強風にさらされて入り江の波が荒れていようと、忌むべき暗礁が眠れる怪物の「とくぎざぎざ」な背を突き出している間を抜けられることを、漁師は経験上知っていたのである。

運命の女神が父を、妹を、私を連れ来たつたのは、かような荒れ果てた土地だった。

だが私たちにとって、その寂しさなど恐るるに足らなかつた。大都會の活気と喧騒、細々とした収入で世間体を取り繕わねばならないつらさを感じる日々からすれば、遙かな地平線やピリツとする冷気には、魂まで荒い清めてくれる素晴らしい晴朗さが感じられた。

北原 尚彦訳

「ナン・ドール」The Mystery of Clomber」の第二章からの抜粋である。この二通りの訳のうちどちらが新しい訳だと思われるだろう。わたしにはむしろ前者の方が新しく思える。少なくとも、松原訳から五十年経て今年出版された新訳が、後者だとは感じられない。

その理由のひとつとして、言葉が古めかしいことがあげられるだろう。たとえば、「恐むべき」「かような」「恐るる」といついかにも文語的な表現。古典を訳すときは、その時代の雰囲気を出すために、古い言い回しを交えたほうがいいのだろうか。まして、ドールの持つてまわったような文章を伝えるには、大仰かつ蒼むしたような言葉を使う必要があるのか。

わたしはそうは思わない。読者があくまで現代のわれわれである以上、生きた今の言葉を使って、描写すべきではないだろうか。たまにならまだしも、新訳の二章の冒頭では「かくも」「すべく」「なし得ぬ」などが目白押しである。また、そういう古めかしい言葉の合間に「ピリツとする」などがあると、それで新しさを出しているつもりかもしれないが、かえってアンバランスに感じてしまう。

わたしが新訳を試みたのは、昔の訳とは明らかに違う、生き生きしたリズムを持った今の言葉でこの小説を語りたいと思ったからだ。一読してずっと内容が頭に入り、映像が浮かぶような訳を目指しているのだが、果たしてそれが成功したか否かの判断は、読者にゆだねよう。（語句の問題だけでない。新訳では構文（発想）もまた議論しなければならないが、これについては改めて論証したい。）

こんなに荒廃した空き家でも、漁師たちにとってはありがたい目印だった。時化の日には、地主様の煙突とクルンバー館の白い塔をつなぐ一直線上に船を進める。そうすればぎざぎざの背中を突き出した眠れる怪獣のような暗礁にぶつからずにすむ。それを経験から学んでいた。

この荒地にわたしたち三人を連れてきたのは、運命のいたずらとしか言いようがない。これほど寂しい場所でも、わたしたちは少しも薄気味悪く感じなかった。都會の喧騒やあわただしさに疲れ、先細りの収入で体裁を繕うことに汲々とする生活。それに比べてここでは果てしない地平線と澄み切った冷気が、新しい息吹をもたらし、心をいやしてくれる。

伊豆野 良江訳